

# 朝鮮民主主義人民共和国の領導芸術性の一展開

—金日成の回顧録『世紀と共に』を素材に—

崔 穎 麗

1. 問題の所在
2. 金日成の成長過程の描写
3. 対比を通じた正当化論理の構築
4. 北朝鮮の望む理想的な人物像
5. 結論

## 1. 問題の所在

小論は、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）の「国父」とされる金日成の回顧録『世紀と共に』<sup>1</sup>（以下、回顧録）を素材に、「広義」の主体思想の重要な側面を構成する「領導芸術」の手法を浮き彫りにすることにより、北朝鮮における大衆動員の内在的論理の究明を目指すものである。

領導芸術とは、主体思想を具現化するための技術の一つとされ、人民大衆を動かす方法であり、北朝鮮では「革命と建設を成し遂げるために、大衆を教養せしめ組織動員する幹部らの能力と手腕」であるとの説明が施されているものである<sup>2</sup>。いわば北朝鮮独自の人民大衆の心を掴む仕組みが領導芸術であるといえる。その領導芸術は、北朝鮮が主張する政治路線を実現するための闘争のなかで、人民大衆を組織・動員する卓越した首領の方法と手腕であるとまとめられるものである<sup>3</sup>。換言するなら、「ウリ式社会主義」<sup>4</sup>に基づく

- 
- 1 『世紀と共に』は、建国から自身の死去まで一貫して北朝鮮の指導者であり続けた金日成の回顧録である。この回顧録は、金日成の出生から成長に至るまでの家庭環境や背景、また金日成が主導したとされる抗日武装闘争から北朝鮮建国までの過程について詳しく叙述している。全8巻から成るこの回顧録は、1992年4月15日の金日成の80歳の誕生日を期して、刊行されることとなった。金日成の生前は、第6巻までが発刊され、残りの2巻は、金日成の死後、朝鮮労働党中央委員会が「委任」という形で要綱や遺稿、党の文庫に保管されている各種資料を基に「継承本」として発刊した。
  - 2 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院『政治用語事典』平壤・社会科学出版社、1970年、189-190頁。
  - 3 「朝鮮語大辞典」『ウリミンジョクキリ』<http://www.uriminzokkiri.com>、2013年9月16日アクセス。
  - 4 北朝鮮は、1980年代末から「ウリ式で生きよう」とのスローガンを掲げつつ、主体思想に基づい

強盛国家を建設するためには、人民大衆を導く「正しい指導路線」は無論のこと、その路線を徹底的に実現させる「統治方法と手腕」が要求され、このために北朝鮮では一般大衆の動向に対する正確な把握、体制の支持に対する正確な誘導、一般大衆を対象に党政策を貫徹させるための政治事業の強化、宣伝煽動手段の効果的な利用を通じた大衆の忠誠心の鼓吹などを領導芸術の主要活動分野として提起するのである<sup>5</sup>。

北朝鮮の主体思想研究においては、その体系を「広義」の主体思想（金日成主義）と「狭義」の主体思想（哲学的原理、社会・歴史原理、指導的原則）とに腑分けし、それぞれ個別に検討する方法が研究者の間で広く共有されている<sup>6</sup>。ここでの検討課題である「広義」の主体思想に対して、「狭義」の主体思想の始原と形成、その発展過程、理論体系を主眼とした研究は、日本と韓国で比較的多くの蓄積がある。これを踏まえるならば、主体思想にまつわる多くの研究は、「狭義」のそれに集中している傾向が否めない。一方、「広義」の主体思想の構成要素である革命理論及び領導方法に対する研究はごく僅かに過ぎない<sup>7</sup>。

回顧録を検討の素材に用いるのは、それがこんにちの北朝鮮国内において、「革命偉業の将来を照らしてくれる闘争と生の教科書」として喧伝され<sup>8</sup>、様々な場や方法でそれが人びとに活用・普及され、人口に膾炙しているからである。また、この回顧録は、金日成政権の後継として出帆した金正日政権下に人民大衆を結集させるべく目的論的に叙述された側面を持ち合わせており、具体的な史的展開やその客観情勢が眺められるものではない。その意味では、メタ・ヒストリーな素材である。しかしそれゆえに、「回顧録に滲む民族主義が示すキリスト教に対する親和的な態度は、今後の北朝鮮の対南戦略の方向性を見出

---

た「ウリ式社会主義」を定式化した。ちなみに、「ウリ」とは「我々」という意味の朝鮮語である。北朝鮮は、東欧における社会主義の自壊をめぐり、「こんにち、一部の国々で社会主義が挫折したのは一時的な現象であり、人類が社会主義に向かって進むのはいかなる力でも阻止し得ない歴史の法則」であると主張している。つまり、北朝鮮の「ウリ式社会主義」は、社会主義が人類の当為であることを前提に、永遠不滅の卓越した主体思想に基づく、もっとも独創的で優越した「社会主義」だということになる。言い換えれば、「ウリ式社会主義」は、人類の真なる福祉生活が保障され、理想社会を具現した政治制度のことである。「北韓用語辞典」『デジタル北韓百科辞典』<http://www.kplibrary.com/nkterm/read>、2013年12月28日アクセス。

5 同上。

6 「広義」の主体思想に関する代表的な研究は、韓基壽『北韓主体思想の淵源と性格』1992年度韓国外国語大学校博士学位請求論文、韓国外国大学校大学院、1992年〔未刊行〕、崔成哲「北韓統治理念に関する研究」『漢陽大学社会科学論業』第17輯、1998年などが挙げられる。「狭義」のそれに関する代表的な研究は、尹晋憲『北韓の主体思想研究』螢雪出版社、1995年などが挙げられる。

7 前掲、『北韓主体思想の淵源と性格』、「北韓統治理念に関する研究」など、僅かである。

8 「北韓用語辞典」『デジタル北韓百科辞典』<http://www.kplibrary.com/nkterm/read>、2013年8月22日アクセス。

させてくれる」と、韓国の北朝鮮研究の第一人者である李鍾奭が指摘するように<sup>9</sup>、それは北朝鮮の内在的な理念を理解するには格好の材料である。

以上のような問題意識に立脚しつつ、以下では回顧録の論理展開・内容の分析を次の諸点から行っていく。第一に、「亡国の民」として満州地域で抗日武装闘争を展開した金日成の活動と、そのなかで培われてきたとされる民族感情を利用した主体的立場の形成背景、またこれらに基づき、金日成＝首領の下に一つの組織化された力量として人民大衆を結束しようとする工夫を抽出する。第二に、日本帝国主義・軍国主義に対する批判と北朝鮮における共産主義社会に対する宣伝、さらに抗日戦争時期の「苦難の時期」と現在の社会主義的生活との対比的手法による「敵の造成」を通じた内的団結の意図を抽出する。第三に、こうした体制の正統性、内的団結のために描かれた「同志」あるいは「大衆」の人物像を明らかにすることで、人民大衆の「模範」を抽出することである。このような、共鳴帯の醸成<sup>10</sup>、精神教養、人間関係の模範提示などの人民大衆の心を掴む仕組みを検討することにより、領導芸術の一展開を明らかにすることで、北朝鮮の「自主」とそれを論理的に担保する人民大衆の統制手段に肉薄したい。

## 2. 金日成の成長過程の描写

金日成の生涯は、「朝鮮の近代史において、民族の受難がもっとも暗澹とした1910年代」に始まるとされている<sup>11</sup>。それは、「韓国併合」に基づく「朝鮮総督府による支配」によって、朝鮮人民が奴隷状態に陥り<sup>12</sup>、朝鮮半島は朝鮮民族の生を育むことのできない生き地獄であったとされるからである<sup>13</sup>。

このような「民族の受難」時代に生を受けた金日成は、同時代を共有し、同一の使命感に結束された、他の朝鮮人らの共感を得やすい基盤を有していた。また、金日成の成長や革命遂行の過程は、不断に「他郷」から「他郷」への移転の繰り返しの歴史であった。これはとくに「故郷」に対しての執着心を有する朝鮮民族にとって、金日成の如く幼くして祖国を離れ、他国で間借り生活を余儀なくされた「亡国奴」の生活を一日も早く清算し、

9 李鍾奭『新しく書いた現代北韓の理解』歴史批評社、2000年、59頁。

10 亡国の悲運に直面した金日成及びその家族らは、民族のために身を投じたとされる。金日成『世紀と共に』第1巻第1分冊、朝鮮労働党出版社、1997年、4頁（以下、同回顧録からの引用にあたっては、『回顧録』1-1、4頁の要領で略記する）。このような、金日成及びその家族らが「祖国」「民族」に対して行った献身的な活動の描写は枚挙に遑がない。そうした描写は、「祖国」や「朝鮮民族」に対する独特な執着心を有する朝鮮の人びとの共鳴を得やすくさせる素地となるものであろう。

11 『回顧録』1-1、1頁。

12 同上、1頁。

13 同上、2頁。

祖国の光復が訪れることは宿願でもあった。その点で、金日成が幼少時より革命の道を歩んだという「事実」は、英雄の所行であり、北朝鮮の国民に対して感化を浸透させやすい素地となるものである。加えて、この時期、1950年代に主張されることとなる「主体」や現今の北朝鮮において唱道されている「先軍」のような言葉は無論現れていなかったものの、金日成が「他国の軍隊に任せる有様では、この国は誰が守り、世話をするというのか」<sup>14</sup>との認識を示したことは、「事大」の対となる「主体」や「自衛」の先鋭的表現である「先軍」の萌芽を示唆する認識として捉えられるものである。

また、回顧録により描かれる金日成の家族は、同時期の多くの朝鮮人家庭のように、貧しい暮らしぶりであった<sup>15</sup>。ところが、金日成の祖父の訓戒である「お金はなくても生きていけるが、仁徳がなければ生きていくことができない」は、金日成の家族の哲学であった<sup>16</sup>。このことは物理的な豊かさよりも道徳的な高さに重きを置くという点において、儒教を内面化させた朝鮮民族の固有な美風の一つでもある<sup>17</sup>。さらに、金日成の家族は仁徳を重視しただけでなく、革命性もまた高い「先駆者」であったという<sup>18</sup>。

このような家庭で育った金日成は、幼い時分から「志遠」という父親金亨稷の座右の銘に影響を受けた。「志遠」とは、個人の栄達や立身出世を念頭に置く世俗の人生教訓ではなく、祖国と民族のための闘争のなかで、真の生きがいと幸福を見つける革命的な人生観であり、代を継いで闘っても、必ずや「祖国」の光復を成すべき不撓不屈の革命精神であるとされる<sup>19</sup>。これは現今の北朝鮮の体制が、「首領の領導を代を継いで継続的に実現することを目的とする」ものとして具象化されていることと通じているのは言うまでもない<sup>20</sup>。

また、金日成の父親金亨稷は、1910年代における間島の実状から<sup>21</sup>、朝鮮半島は朝鮮人

---

14 同上、2頁。

15 同上、4-5頁。

16 同上、6頁。

17 「歴史常識」『ウリミンジヨクキリ』<http://www.uriminzokkiri.com>、2013年12月28日アクセス。

18 たとえば、金日成の祖父である金輔鉉は、「男は戦場において敵との闘争の中で死ぬべきだ」と語り、家族に対して国のために生きることを教育し、子弟らを革命闘争に赴かせた。また、祖母である李寶益は、関東軍将校らに連行され、金日成に「帰順」（投降）するよう呼びかけることを強要された際、これを厳しく咎めながら抵抗した。さらに、金日成の外祖父も、故郷で私立学校を建立し、朝鮮青年らを勉強させ、一生を後代の教育と独立運動に捧げた愛国者、教育者であった。『回顧録』1-1、9頁。

19 同上、16頁。

20 鐸木昌之『北朝鮮－社会主義と伝統の共鳴』東京大学出版会、1992年、6頁。

21 1916年に金亨稷が間島と上海に赴いたその際、中国革命は軍閥の蠢動と帝国主義列強の干渉により、一進一退の深刻な曲折を経験していた。中国革命においても基本的な障害物はアメリカ、イギリス、日本などの外勢であった。しかし、このような事態にもかかわらず、海外に亡命した多くの独立運動者らは、帝国主義者に対する幻想を抱き、どの大国の力を借りるべきかという空理空論に

によって独立が果たされるべきであるとの信念を固めたという<sup>22</sup>。さらに、「3・1運動」の教訓<sup>23</sup>により、金亨稷はロシアのように民衆革命を遂行すべきだとの結論に達し、朝鮮の民族解放運動を民族主義運動から共産主義運動に転換すべきであると主張した<sup>24</sup>。こうした金亨稷による共産主義運動の展開を促す言辞は、金日成の革命思想の礎となるものであった。なぜなら、金日成は自らが展開した共産主義運動の影響について、ロシアあるいは国際共産主義運動からのそれではなく、父親からの影響であると主張しているからである<sup>25</sup>。この主張は、あくまで自らの思想が革命的伝統と自主性に立脚していることを示唆するものである。

従って、「民族の受難」時代に生を受け、高い革命性を持った「先駆者」を祖父に持ち、「志遠」を説く父親の下で育った金日成が革命に没頭したのは、当然の帰結であるだけでなく、革命性の継承の証左でもあった。無論このことは、その後の金正日、金正恩に至る政権の正統性を担保するものでもある。

このように見ると、回顧録の金日成は、朝鮮民族がもっとも暗澹とした受難の時代に生を受け<sup>26</sup>、貧しい朝鮮家庭に育った普通の朝鮮人<sup>27</sup>であること、また彼は当時の多くの朝鮮青年と同様に、祖国を救うために革命へと踏み込んだ人物<sup>28</sup>であることが分かる。他方、金日成は彼の家庭環境や一族の業績<sup>29</sup>、彼自身の感受性<sup>30</sup>、革命に対する情熱と使命感<sup>31</sup>において特異な人物であることも同時に明らかとなる。つまり、回顧録において金日成の成長過程を記した部分では、一方で金日成が不本意な時代や生活、そして同時代の朝鮮人と運命を共に甘受したことを描くことによって、民族という共属感情を醸成しようとする意図が窺え、他方で金日成が革命性という点において独特な家庭に育ち、そこで卓越した資質を開花させたことを記すことによって、他とは区別される人物であることを素描しようとする。とくに金日成の特異性は、父親である金亨稷が著名な革命家であっただけでなく、

---

明け暮れていた。『回顧録』1-1、25頁。

22 同上、25頁。

23 「3・1運動」の指導者らは、朝鮮人民の高揚した闘争氣勢にそくすことなく、当初より運動の性格を非暴力的なものとして規定し、「独立宣言書」を作成して、朝鮮民族の独立意志を内外に闡明するに止まった。さらに、一部の民族運動指導者らは、「請願」の形で朝鮮の独立を試みた。同上、40頁。

24 同上、47-48頁。

25 同上、50頁。

26 同上、2頁。

27 同上、4-5頁。

28 同上、97頁。

29 同上、9頁。

30 同上、74頁。

31 同上、97頁。

彼を取り囲む家族や親族の多くが同じく革命家であったということ、従って金日成は父親やその他同じ血族の人びとから「志遠」、「3大覚悟」<sup>32</sup>、「同志獲得」<sup>33</sup>、「2挺の銃」<sup>34</sup>などの革命的遺産を引き継ぎ、幼くして民族の運命を救うべき重責を背負い、革命の伝統を内在させた後継者として描かれているのである。さらに、金日成は父親である金亨稷から朝鮮人による朝鮮人のための独立という主体性、共産主義運動の展開という先取性を内発的に受け継いだ、自律的な「主体」の体現者であることが強調されている。

以上のように、回顧録における金日成の成長過程の叙述は、彼が人民大衆のなかから生まれ、人民大衆と堅く結びついた関係であることが強調される一方で、彼を取り囲む家庭環境や彼自身の資質、自律性など、指導者としての特質、現今における思想的背景や立場を想起させる内容となっているのである。

### 3. 対比を通じた正当化論理の構築

このように、領導芸術の文脈から回顧録を通覧した際に興味深いのは、前章で述べた如く、指導者としての個人や国家の現状の正当化を図るための叙述が展開されているだけでなく、その指導者が当該国家の領導を目論む内容を際立たせるための対比的な手法が活用されていることである。ここでは、日本帝国主義に対する批判と自国に対する賛美との対比、金日成らが抗日武装闘争において経験した「苦難の時期」と現在の社会生活との対比を中心に分析する。

回顧録では、日本による朝鮮半島の植民地化とこれを遂行した主体である日本帝国主義のあらゆる側面において、金日成による強烈な批判が展開されている。

「私の生涯は、朝鮮の近代史において、民族の受難がもっとも暗澹とした1910年代に始まる。……悠久な歴史と豊富な自然資源、秀麗な山川絶景を誇るその領土は、日本帝国主義の大砲によって踏みにじられた」<sup>35</sup>。

---

32 金亨稷は金日成に対して、「革命家は常に三つの大きな覚悟、すなわち、飢えて死ぬこと、叩かれて死ぬこと、凍えて死ぬことを厭わぬ覚悟を持ち、初心に抱いた遠大な志を捨ててはならぬ」と教えた。同上、126頁。

33 金亨稷が同志との友情について語った教訓を金日成は次のように回想している。「父は、生死や苦楽を共にできる友人は兄弟よりも親しいと語った。……父は同志のためであれば、何も惜しまずに捧げた。それゆえ、父の同志らも命を賭して父を保護してくれた」同上、126-127頁。

34 金亨稷は臨終直前に、自らが愛用していた「2挺の銃」を妻に預け、息子（金日成）が成長して闘争へと旅立つ際にこれを渡して欲しいと頼んだ。同上、128頁。

35 同上、1頁。

金日成によれば、このように独立国家としての祖国の喪失を余儀なくされた彼自身の日本に対する憎しみは、監獄で父親と面会を持つ機会を得たことが大きな契機になっているという。金日成は、「父親の身体に残る傷は、私に悪魔のような日本帝国主義の存在を全身で感じさせるのに余りあるものであった」と述べている<sup>36</sup>。この体験を踏まえ、その後の回顧においては、日本帝国主義を体現する「日本軍警・軍隊」、それが朝鮮半島において遂行した諸政策は糾弾されるべき悪であることを数字や事件・事象を挙げながら、次のように論難する。

「敵らは騎馬警察隊と軍隊までを動員し、至るところで群衆らに刀を振り、銃弾を乱射した」<sup>37</sup>。「……日本帝国主義者らは、我が民族を『皇民化』するために朝鮮民族に日本語を使うことを強要した」<sup>38</sup>。

「李朝の最後の王である純宗が亡くなった際、群衆のなかで涙を流している朝鮮人がいると、日本騎馬警察隊が出動し、銃剣と棍棒で解散させた。国を喪失しても悲しまず、王が死去しても涙を流すことなく、口をつぐむことを強制された。これこそ、『武断統治』から『文化統治』に様変わりした朝鮮総督政治の真の姿である」<sup>39</sup>。

「敵は共産党員が一人でも存在する村に対しては、その村落の住民を全滅させた。共産党員一人を亡きものにするためには、100名の群衆を殺戮して構わないというのが日本軍警らのスローガンであった。朝鮮と満州大陸で日帝は『三光政策』（すべて殺し、すべて燃やし、すべて略奪する政策：引用者注）の提唱と『匪民分離』（『共匪』と言われる革命軍と人民を引き離す意味：引用者注）政策を試みた」<sup>40</sup>。「……延吉ただ一つの県で殺害された人数は、1万余名に達した。間島臨時派遣隊の罪をどんな言葉でもってすれば告発できるといえるのか」<sup>41</sup>。

「1923年に起きた『関東大震災』を朝鮮人弾圧の好機とした日本の極右分子らは、軍隊を出動させ、至るところで日本刀により朝鮮人を次から次へと無残にも殺した」<sup>42</sup>。

---

36 同上、32頁。

37 同上、37頁。

38 同上、85頁。

39 『回顧録』1-2、133頁。

40 『回顧録』3-1、11頁。

41 同上、10頁。

42 『回顧録』4-1、111頁。

「日本帝国主義者らは、朝鮮農民が心血を注いで生産した米を毎年700万～1,000万石ずつ、日本本土に運んでいった」<sup>43</sup>。

以上のような日本による過酷な植民地統治は、北朝鮮国内では人びとに共有された「事実」でもある。従って、30余年間、日本の植民地として支配された朝鮮人にとって、「日本」とはそれだけで暗いイメージを伴う言葉であるのに加え、それを内面化させた北朝鮮の人びとの恨みを自然に噴出させ、一心団結を図る合い言葉となる。

こうした日本帝国主義の非人道性・残虐性に対比して、これに抵抗した金日成らの闘争の歴史は、朝鮮民族を救うための英雄的闘争であり、その過程においては愛国、愛族、愛民に溢れた「愛」が滲む涙ぐましい革命の歴史である。この点で、1926年10月17日の「打倒帝国主義同盟」（北朝鮮ではその朝鮮語を略し、しばしば「トゥドゥ」と呼ばれる）の結成は、金日成の革命の起点である。この同盟は、反帝、独立、自主の理念の下に、民族と階級の解放を実現するために社会主義、共産主義を志向する新しい世代の青年らで組織されたという<sup>44</sup>。この組織を基盤に金日成は、その生涯を捧げ民族の尊厳と自主性を守るために闘った<sup>45</sup>。彼は朝鮮民族を害し、朝鮮の自主権に挑もうとする存在を決して許さなかったことを回顧録のなかで幾度も強調している<sup>46</sup>。そうした抗日武装闘争を展開した金日成やその同志らは、日本帝国主義者とは異なり、共産主義道徳の持ち主で、人民らを無窮に愛する「情」に溢れた優しい人々であると描く。

「我々は、革命闘争を遂行する過程で古い社会の封建的な人間関係と道徳規範を打破し、新たな共産主義的人間関係と道徳規範を創造して、それを後世に一つの財産として残した。……我々は人民らと血縁的な連携を強化する方法により革命を深化させた」<sup>47</sup>。

「われわれは、敵らを攻撃して、人民らの食糧問題を何度も解決した。われわれは、節約して蓄えた米を人民に与える一方で、つましい食事をした」<sup>48</sup>。

こうした革命家（善）と敵（悪）、革命家（無償の存在）と人民大衆（施されるもの）という二つの二分法的関係の把握を前提とする独特の共産主義的義理を実質化するために、金日成らは人民の要望と人民の利益に符合する人民の思考方式を獲得しようと努めた。

---

43 『回顧録』6-3、322頁。

44 『回顧録』1-2、166頁。

45 『回顧録』4-1、115頁。

46 たとえば、同上、115頁。

47 『回顧録』6-2、258-261頁。

48 『回顧録』3-1、125頁。



具体的には、人民との直接的な接触を通じて、人民の声はもちろん、息遣い、目付き、表情、話し方、身持ちに至るまで、自らの目と耳で会得するのに尽力したという<sup>49</sup>。たとえば、次のような経験が語られている。

「我が遊撃隊員らは、数多くの農民らの農事の手助けを行った。ある隊員は山で木を伐採し、農家の垣根を修理した」<sup>50</sup>。「遊撃区を解散する過程で我々は、人民のために最大の奉仕に尽力した。我々は、住民らの要求と実情に合わせて、移動準備事業を進めた。……抛り所のない子供と患者のために、武装小組を派遣して、目的地まで責任を持って護送した。また、人民らに手当てする資金と物資を確保するために、数回の戦闘を行った」<sup>51</sup>。

「ある日、私は宿泊させてもらっていた中国人農家の老人夫婦を手伝うために、氷を掘ろうと斧を持って豆満江に出向いた。ところが、氷を掘り終わるや斧を川の中に落としてしまった。どんなに探しても斧は見つからなかった。私は、主人に斧の値段以上の額を弁償し、何度も謝った。……もちろん老人には斧の値段以上の対価を支払ったが、申し訳ない気持ちは消えなかった。だから、1959年の春に抗日武装闘争戦跡地踏査団が中国東北地方へ赴く際、私に代わりその老人に改めて謝罪することを頼んだ」<sup>52</sup>。

ここでは、金日成らが人民との直接的な接触に努めたことが述べられるだけでなく、彼が建国後に首相という地位についても人民との交わりを忘れず、人民に対する視線に変化がないことが示されている。これらは非人道的・残虐的な「日本帝国主義者ら」に比して、金日成ら抗日武装闘争の同志らは、人間的・道徳的であることを浮き彫りにする。そのみならず、人民のために辛苦を惜しまない共産主義的義理を貫く領導者であることを強調しようとしているのである。

次に、金日成らが抗日武装闘争において経験した「苦難の時期」＝「苦難の行軍」と現在の社会生活との対比について検討する。「苦難の行軍」とは、1938年12月から翌年3月末にかけて、濛江県南排子－長白県北大頂子間の道程を朝鮮人民革命軍の主力部隊が行軍したことをいう。この行軍は、抗日闘争の討伐のための日本軍、満州軍による追跡の結果敢行されたものである<sup>53</sup>。この過程では、極度の食糧不足が金日成部隊を苦しめることになる。回顧録において金日成は、この「苦難の行軍」の様子を端的に述べれば、「厳酷

---

49 『回顧録』 1-3、268 頁。

50 『回顧録』 3-1、39 頁。

51 『回顧録』 4-1、148 頁

52 『回顧録』 3-1、40 頁。

53 「苦難の行軍」に関して詳しくは、『回顧録』 7-2、147-181 頁。和田春樹『金日成と満州抗日戦争』平凡社、1992年、201-203 頁などを参照。

な自然との闘争、食糧難と疲労との闘争、恐怖の病魔との闘争、奸悪な敵との闘争の呪縛、これら苦難を克服するための自分自身との闘争が折り重なった、始めから終わりまですべての試練と難関が降りかかった」と語っている<sup>54</sup>。

このような金日成の描写で表される「苦難の行軍」であるが、他方部隊員の回想として語られる内容としては、乏しい食糧を金日成や呉仲洽<sup>55</sup>がいかに自らは食すことなく、部下に分け与えたか、これに対して部下らも司令官に食べてもらおうとしたかという逸話が繰り返し述べられる<sup>56</sup>。そしてそれは、「苦難の行軍」においてもっとも苦難であったことを示すものでもある。「飛行機に発見されるのを恐れ、火を焚くことができず、馬肉を生で数日間食べ続けた」こともあった<sup>57</sup>。

こうした苦難の状況を打破することができたのは、回顧録によれば、百折不屈の革命精神と自力更生、艱苦奮闘の革命精神、革命的楽観主義精神、それに革命的同志愛であったという<sup>58</sup>。さらに、忘れてならないのが、金日成ら司令官に対する人民らの愛と支援である<sup>59</sup>。ここにおいても、北朝鮮が強調する共産主義的義理の模範が示されているのである。

この時期と比較すれば、現今の北朝鮮は、仁徳政治を施す党の領導の下で、万民が一つの大きな家庭のなかで和睦に暮らしている状況下にある<sup>60</sup>。

「現在は、良い制度の下で、人々や職業の間に階級がなく、誰でも功を立てれば栄誉を享受し、万人の喝采を博する。また、どこに行っても豊かな文化生活が楽しめる。お祭りの広場と祝典の舞台は、労働のなかで生まれた踊りと歌に囲まれ、不夜城を成す夜の街と公園は幸福に恵まれた人々で満ちている」<sup>61</sup>。

とはいえ、現今の北朝鮮においても困難が見られない訳ではない。回顧録では、現今の北朝鮮が直面する困難を次のように指摘し、その克服の道筋を述べている。

「我々は、困難な環境のなかで社会主義建設を行っている。我々の革命は依然として艱

---

54 『回顧録』7-2、151頁。

55 呉仲洽は、「司令部」を擁護することに一生を捧げ、それがもとで戦死した人物である。金日成は、人民軍隊の中で呉仲洽を見習う運動を活発に展開し支持する金正日に対して、非常にいいことだと語っている。『回顧録』7-3、356頁。注80も参照。

56 前掲、『金日成と満州抗日戦争』201頁。

57 同上。

58 『回顧録』7-2、179頁。

59 同上、180頁。

60 同上、199頁。

61 『回顧録』6-2、210頁。

苦な行軍の道を続けている。過去には、数十万の日本軍が我らを包圍し、追撃しようとしたが、現在はそれと比べようもないほど強大で暴悪な帝国主義勢力が我が国を圧殺しようとしている。このような状況で我々が生ける道は、抗日革命先烈らが苦難の行軍の時期に發揮した白頭の革命精神をそのまま実生活に徹底して具現することである」<sup>62</sup>。

つまり、現今の北朝鮮は、人類社会でもっとも優れた社会制度であるとみなされる社会主義・共産主義社会を建設する過程のなかにある。それゆえ、現状の一時的な困難には耐え、克服しなければならないことを強調する。「苦あれば楽あり」というように、先達である金日成自らも艱難な抗日戦争を経て、漸く祖国を回復した。現状はどんなに苦しくても、過去の経験に比すれば臆することではないから、革命精神を發揮して最後まで戦うべきであるということを述べている。加えて、現状は「困難な環境」ではあるが、それは帝国主義の圧殺のせいであると、日本帝国主義への批判から連想させる形で、現今の帝国主義勢力批判への同一化を図る。こうして、国を守るために必死に闘争しなければならないことに対して、国を喪失した人民は、過去の無残な亡国奴の歴史を繰り返すことになることと想起させ、「苦難の行軍」の経験が模範化されるのである。次の回顧録の叙述はその典型である。

「亡国は瞬間で、復国は千年だということが、抗日革命 20 年の路程を歩みながら私が得た重要な教訓だ。……フィリピンとインドネシアは 300 年、アルジェリアは 130 余年、スリランカは 150 余年、ベトナムはおよそ 100 年ぶりにそれぞれ独立を成就したということは、亡国の対価がいかに高いかを示している。従って、私は常日頃から、若者たちに対して祖国を失うということは生きていても死んだ命と同じだ。亡国奴になりたくないのなら、祖国を守れと言っている」<sup>63</sup>。

以上のように、ここでは日本帝国主義に対する批判と自国に対する賛美との対比、金日成らが抗日武装闘争において経験した「苦難の時期」と現在の社会生活との対比を通じてその内容を検討することにより、回顧録に示される領導芸術の方法を考察した。このように見てみると、第一に、人びとの日本帝国主義に対する反感を愛国感情に転化し、外勢に対する内部団結を図ろうとする試みが看取される。第二に、内部団結を維持し、現今における困難を乗り越えさせようとの企図が見られるのが「苦難の時期」と現在の社会生活との対比である。この対比を通じて、現状がどんなに困難であっても、少なくとも敵との直接的な対峙のない祖国で暮らしているから、「苦難の時期」とは比べようもないほど恵ま

62 『回顧録』 7-2、181 頁。

63 『回顧録』 8-3、489 頁。

れていることが伝えられる。また、具体的な数値目標を掲げることは控え、抽象的な社会主義・共産主義建設を掲げることにより、曖昧だが未来志向的な精神的安定剤を植え付け、大衆に対する無条件の忠誠心を図っている。加えて、常に戦争を念頭に置き、軍隊を強化しなければ、「暗澹とした」時代に戻ってしまうことを強調し、現在の生活よりも国家の軍隊を強化する妥当性を支える論理が構築されているのである。

#### 4. 北朝鮮の望む理想的な人物像

ここまで、回顧録の内容分析を通じて、金日成の成長過程の叙述や対比の手法などを用いつつ体制の正統・正当性確認やこれを基に内的団結が図られてきたことについて明らかにしてきた。本節では、さらに内容分析を推し進め、回顧録に描かれる「同志」及び「大衆」の人物像を抽出し、人民大衆の「模範」を素描してみる。なぜなら、領導芸術はあくまで「大衆を教養せしめ組織動員する」能力や手腕を示すものだからである。

先にも指摘したが、この回顧録でしばしば言及されるのは、朝鮮民族の原理的特質であり、その重要な側面を構成する人間的な「情」である。金日成は、「朝鮮民族のように情に笑い、情に泣く民族がほかにあるだろうか」と、朝鮮民族の特性を挙げる<sup>64</sup>。また、この人間的な「情」は、人間の「愛」に通じ、人間の様々な「愛」のうちで、もっとも高い地位に位置付けられるのが「革命的同志の愛」であるという<sup>65</sup>。

「世の中には、様々な愛があるものの、そのなかでもっとも重要なのは、革命的同志の愛である。……過去、我が同志らは、幾日も水だけで過ごさなければならなかった血塗られた闘いの最悪の状況下でも、雪のなかで凍った山の実を見つけたら、まず同志の口に入れてあげた」<sup>66</sup>。「……私は、司令官のために非常食として準備された米粉を隊員に分けてあげた。こうした経験は少なくなかった」<sup>67</sup>。「私だけではなく、新隊員に自分の綿衣を着せ、単衣で酷寒に耐える老隊員もいた」<sup>68</sup>。

このように描写される「革命的同志の愛」は、「苦難の行軍」に代表される抗日戦争の過程で、革命を勝利へと導いた重要な要因であったと説明される。無論、このことはこんにちの北朝鮮でも不変の教訓である。たとえば金正日は、2004年4月7日に行った朝鮮労働党中央委員会幹部らとの談話のなかで、「革命的同志の愛は一心団結の基礎であり、

---

64 『回顧録』3-3、354頁。

65 『回顧録』4-2、267頁。

66 『回顧録』4-2、267頁。

67 『回顧録』7-2、179頁。

68 同上、180頁。

我が革命の原動力である」と述べている。また、この談話のなかでは、金亨稷と金日成の関係と同様に、金日成と金正日の関係もまた、親子関係を越えた革命的同志関係で結ばれており、それは人類の「愛」の頂点だと述べられている<sup>69</sup>。

つまり、この回顧録によって革命家の崇高な人間関係であると描写されている「同志の愛」は、金日成と金正日との関係に援用され擬せられるという目的を持つものである。換言すれば、この回顧録は、金日成政権の後継として出帆した金正日政権下に人民大衆を結集するために、目的論的に叙述された側面、いわば金日成＝金正日の同一化を示唆するものである。それでは、いかなる内容の金日成の経験を金正日と同一化しようとしているのか、その内容を詳細に検討してみる。

### (1) 金亨稷とその親友たち

「革命的同志の愛」に基づく人間関係は、回顧録においては金日成の父親世代からその関係の存在が描かれている。金日成の父親である金亨稷と生死をともした親友の共通点は、人間的に親しく付き合いながら、「祖国」と民族の運命について同じ志を有する人びとだということである。その代表的な人物としては、洪ジョンウ、金シウ、孫貞道牧師などの具体的人物が挙げられている。金亨稷とそれら親友との関係は、その世代に止まるものではなく、金亨稷の死後はその息子を取り囲む幅の広さで続けられた<sup>70</sup>。

洪ジョンウは、植民地統治下で憲兵補助員をしていた人物であった。しかし、金亨稷の影響を受け、革命の支持者、幫助者に転向した。洪の助けを受け、金亨稷は幾度も危険な状況から脱することができた。また洪は、故郷に戻っても金日成の家族を助けた。「祖国解放戦争」(朝鮮戦争)の停戦から数年後、その恩に報いるために金日成は、幹部らに対して洪を探すよう命じた。洪はすでに還暦を越えた年齢であったが、金日成は彼を党の幹部学校に入学させてやり勉強を施した。その後、洪は晩年に至るまで、金亨稷の革命史跡を発掘するのに献身した。こうした洪をめぐる逸話を通じて、祖国と民族のために自らの精神で生きることを決心した人に過去の経歴は障害にならず、重要なのは革命思想と献身の精神であることを主張しようとしている<sup>71</sup>。

金シウは、中朝国境に程近い慈江道慈城郡で抗日活動を行っていた時から金亨稷と連携を結んだ独立運動家である。金シウは、祖国の独立のために、大衆啓蒙、後代教育にはじまり、武器購入、資金調達など、幅広い分野において活躍した。中国国内における国共内戦の際には、革命後援会委員長として日本軍及び蒋介石軍の侵害から朝鮮人の生命財産を

69 金正日『革命的同志の愛は一心団結の基礎であり、我が革命の原動力である』外国文出版社、2010年、2-11頁。

70 『回顧録』1-2、136-144頁。

71 『回顧録』1-1、66-71頁。

守ることに全力を尽くしたとされる<sup>72</sup>。1958年に金シウは、中国から北朝鮮に帰国したが、自らのこうした経歴を一度も口にするのがなかった。彼は臨終の間際になって、家族に対し金亨稷・金日成との関係を告げた。「私が死を前にして昔話をするのは、君らに何らかの利益を与えるためではない。我が家族にはこうした経歴があるのだから、君らも將軍様をよく奉らなければならないということだ。国事に忙しい將軍様を一步でも疲れさせてはならない」と描写されている<sup>73</sup>。革命の指導者としての資質のみならず、それを支える人民の忠誠心もまた、代を継いで継承されるべきであることを示唆している。

孫貞道牧師は、金亨稷と深い人間関係を有していた人物であるとともに、中国の吉林で展開していた金日成の革命活動を積極的に支援した。金日成は、この牧師を語る際に、生命の恩人だと述べている。その後、金日成と孫牧師の家族は、別々の道を歩んだが、彼らに対する思いを金日成が忘れることはなかった。1991年5月、アメリカの病理学医師であった孫牧師の末子孫ウォンテが北朝鮮を訪問した。60年ぶりの再会であったが、金日成は「人情は時間よりも強い力を持っている。真実で結ばれた友情と愛は、衰えも変質もすることはない。祖国愛と民族愛、人間愛に溢れた孫ウォンテの姿は、まさしく孫貞道の姿であった」と語った<sup>74</sup>。

このように、回顧録のなかでは、金日成の父親である金亨稷とその親友らを描くことにより、第一に、金亨稷の死後も、彼の親友たちが金日成に対する惜しまぬ支援を行い、従って「革命的同志の愛」は不滅で、それは代を継いで継承されるものであること、第二に、これに対して金日成は、義理的な温情でこれに応え、解放後にはそうした父親の親友らを重用し、老後を保障し、また闘争期に別々の道を歩んだ恩人に対しても、家族のように歓迎して恩返しを行う、共産主義的義理を体現する人物であることが示される。これらは金日成の指導者としての広い度量と義理を浮き彫りにする効果を持つものであろう。

## （2）金日成とその同志たち

次に検討を施すのは、金日成自身の「革命的同志の愛」に基づく人間関係の描写である。ここにはいくつかのパターンが看取され、それは、1）革命のために犠牲となった同志、2）中国における同志、3）解放後祖国で優遇を受けた同志、4）革命第二世代による革命継続、5）開国元勳となった同志の5つのパターンである。

### 1）革命のために犠牲となった同志のパターン

反帝青年同盟委員長であり、『農友』の主筆であった崔一泉は、五家子で金日成が世話

---

72 『回顧録』1-2、183頁。

73 同上、181-182頁。

74 『回顧録』2-1、11-15頁。

になった人物である。解放後には、政治的混雑と無秩序が蔓延するソウルで、彼はすべての精神を傾け『海外朝鮮革命運動小史』を草した。その後は政界に進出し、朝鮮革命党政治部長、新進党中央委員会部長、金日成將軍歡迎委員会委員、民族自主連盟執行委員などの重職を歴任しつつ、呂運亨、洪命熹、金奎植などと連携して、民主的勢力の集結と南北統一のための闘争を展開したが、祖国解放戦争中にソウルで殺害されたという<sup>75</sup>。

呉仲洽は、正義感が強く、不正には決して妥協しない不屈の精神の持ち主であるが、闘いは巧みな指揮官であった<sup>76</sup>。彼は組織をまとめることに長け、規律を重んじる闘士でもあった。呉仲洽は、金日成の命令と指示を寸暇も惜しまず無条件に徹底して遂行した。とくに呉仲洽が称揚されるのは、革命に対する無限の忠実性である。彼は、何よりも金日成の思想と路線に忠実であった。また、いつ・いかなるとき・どんな状況においても自らの司令官の思想を無条件に擁護し、その思想に反する事象に対しては、猛虎のように闘争を展開した<sup>77</sup>。革命に対する忠実性、さらには自らの司令官に対するその忠実性は、司令官を政治思想の側面からだけでなく、命で擁護しようとした決死擁護精神において表れているという<sup>78</sup>。呉仲洽は司令部を擁護することに一生を捧げ、戦死した人物であるとされる<sup>79</sup>。

以上に挙げた人物は、金日成の抗日武装闘争において、革命のために犠牲となった人びとであるが、彼らはいずれも高い志を有しながら、一定の業績を築き、それは金日成の領導に基づく帰結であるという点において共通する。これら革命のために犠牲となった人々は忠誠の模範であり、こんにちの北朝鮮においても金正日に対する忠誠の模範として反芻され、称揚されている<sup>80</sup>。

## 2) 中国における同志のパターン

楊靖宇は、抗日武装闘争の時代に、朝中両国人民の共闘に大きな意義を与え、抗日各連軍、各部隊の連合と協同のために努力を尽くした「恩人」として賞賛される人物である<sup>81</sup>。楊靖宇と金日成は、抗日連軍の共同闘争過程を通じて密接な関係を築きあげた。1940年2月に楊靖宇は敵の「討伐隊」との戦闘のなかで犠牲となった。彼を最後まで防衛したの

75 同上、188-191頁。

76 『回顧録』7-3、337頁。

77 同上、347頁。

78 同上、348頁。

79 同上、351頁。

80 たとえば、呉仲洽が率いた連隊の名を冠する「呉仲洽7連隊称号争奪運動」は、金正日を首班とする革命首脳部を、命を賭して死守する活動を称揚するものとして、その展開が図られている。『労働新聞』2005年1月1日付（新年共同社説）。

81 『回顧録』7-1、90頁。

は、金日成らが南排子で差し向けた伝令兵らであったという<sup>82</sup>。中国において「楊靖宇烈士」を祈念するために、通化市に「靖宇陵」が建てられ、その開園式の際には、金日成は花束を贈った<sup>83</sup>。加えて、「東北抗日聯軍の行った英雄的な抗戦の旗には、中国人民が生んだ熱烈な共産主義者である楊靖宇の血も染まっています。我が人民は、共闘抗日の道程で楊靖宇の果たした輝かしい闘争の業績を永遠に忘れられません」とのメッセージを発した<sup>84</sup>。

魏拯民は、中国の革命家でありながら、朝鮮人革命家を支持し、朝鮮革命のための尽力を忘れなかった人物である<sup>85</sup>。「情には情で返す」ということわざがあるように、魏拯民は朝鮮人隊員を愛し、金日成らもまた魏拯民のために全力を尽くした<sup>86</sup>。

抗日武装闘争を通じ、金日成が中国の人びとと同志的關係を結んだことはよく知られているところである。それらの人びとに対する言及は、その業績を鼓舞するだけでなく、国際共産主義運動の展開とその連携の意義を強調する意味合いもある。さらに、魏拯民の逸話を通じて、中国人もまた、金日成の領導を認知していたことを示すのである。下はその典型である。

「魏拯民のそばで仕事をしたことがある我々の同志の話によると、魏拯民は常に朝鮮革命の運命は我らの連携とともにあると言ひ、話をするたびに金日成同志を高く奉じるように述べたということだ」<sup>87</sup>。

### 3) 解放後祖国で優遇を受けた同志のパターン

三光学校の高等課程学生らは皆賢明かつ聡明だった。そのなかで、金日成が忘れられないのは柳チュンギョンと黄スンシンである。男性に比べ女性に対する警戒が緩まる機会を利用して、金日成らは孤榆樹から「カ倫」あるいは吉林に帰る際には、柳チュンギョンと黄スンシンの二人に武器の管理を任せた。解放後、黄スンシンは祖国へ戻り、最高人民會議の代議員としても活躍した。柳チュンギョンは、満州を転々としていたが、人生の末年を祖国で暮らしたいと願ひ、1979年に帰国した。黄スンシンのように若くして帰国していたら、彼女も著名な女性活動家になり、社会と人民のための活力ある後半生を過ごしただろうことが金日成により語られている<sup>88</sup>。

---

82 同上、103頁。

83 同上、104頁。

84 同上。

85 『回顧録』8-1、85頁。

86 同上、86頁。

87 同上、104頁。

88 『回顧録』2-1、185-186頁。



五家子<sup>89</sup>の文ジョヤンは、反帝青年同盟の組織部長として活動しつつ、金日成らの活動を支援した人物である。文ジョヤンの兄である文シジュンは、情に厚く、何か月もの間、金日成らの面倒を見ながら、朝鮮の独立を託した。文ジョヤンが80歳の誕生日を迎えたときには、金日成は五家子での生活を想起しつつ、彼に花束と誕生日の祝いの席を用意した<sup>90</sup>。

以上のような、金日成の抗日武装闘争を助け、その後彼の恩恵を受けた人びとの描写は、金日成が同志の忠誠に対し、その義理、つまり革命的義理を忘れないという、領導者の資質を持った人物であることを浮き彫りにするものである。また、文ジョヤンのことを回想する件では、「地方へ視察に行くたびに、接待員らは『漬け大蒜』を用意してくれる。しかしその味は、困難だった時期、五家子で粟飯を水に漬け、『漬け大蒜』とともに食した味とは比べものにならない」<sup>91</sup>と語られている。「漬け大蒜」は、当時の貧しい時期に、朝鮮の人々が数少ないおかずとして食卓に載せていたものである。この回想は金日成の庶民性を示すとともに、貧しい時代を経験した読者に共感を呼び起こす一節であろう。

#### 4) 革命第二世代による革命継続のパターン

李光は、吉林で金日成らと関係を深める過程で、共産主義信奉者となった。李光は、大小の戦闘で指揮官として高い手腕と能力を発揮した。ところが、李光は、反日の旗を掲げる傍ら匪賊に転落して日本に買収された反動者に騙され殺害された<sup>92</sup>。李光の息子である李ボチョンは中国人民解放軍の中隊長であったが、朝鮮戦争時に人民軍に編入され、指揮官として戦い、1950年に戦死した<sup>93</sup>。幸いに、李ボチョンの息子が生き残り、祖父の世代

---

89 三光学校も五家子も、現在中国に所在する学校及び地名である。1930年代、金日成らは中国の満州地域を拠点に革命活動を展開した。中国におけるこれら朝鮮人の定着過程は、次の四つの段階に分けられる。すなわち、①17世紀に後金軍の捕虜となった朝鮮人、②19世紀後半から20世紀初頭にかけて、朝鮮王朝の統治下で破産し離農した農民、③日本による朝鮮半島植民地化以降に朝鮮半島から脱出した反日人士、反日団体成員及び植民地統治下で破産し離農した農民、④1937年から1945年にかけて、日本の満州支配とともに実施された朝鮮人計画移民に基づく移住者。権立編『中国朝鮮族史研究』（第2輯）延辺大学出版社、1994年。なお、1945年8月の朝鮮半島解放以後、満州地域に居住していた約70万人の朝鮮人が帰国を果たすが、それ以外の多くの朝鮮人は中国に残留した。その後、こうした人びとは、1949年の中華人民共和国成立とともに、中国の朝鮮族として認められることとなった。このような経緯に従えば、1930年代に満州地域で反日活動を展開していた文ジョヤンにとっての祖国は朝鮮半島であったと言える。

90 『回顧録』2-1、188頁。

91 同上、188頁。

92 同上、147-158頁。

93 『回顧録』3-2、163頁。

が開拓した道、父親の世代が広げた道を、代を継いで歩んでいる<sup>94</sup>。

このように、李光と李ポチョン、李ポチョンの息子に代表される革命活動の継続性を紹介した上で、次のような教訓が引き出されている。

「李光の烈火のような生涯と革命活動を深く把握していた金正日組織指導秘書は、1970年代に映画作家らに対して、李光を原型とした芸術映画『初めての武装隊伍であった物語』を作製するよう命じた。……李ポチョンの息子は今、銃隊をもって祖父の世代が開拓し、その後を継ぎ父親世代が広めた道を元気に歩んでいる。一家族が3世代を通じて銃を握るということは、実に聖なることであり、誇るべきことである。……李ポチョンの息子は、私と会った際に、自らはもちろんのこと、自分の子供たちにも軍服を着せ、金正日元帥のために代を継いで忠誠を尽くすと決意していた。」<sup>95</sup>

金クムスは、抗日革命の風浪のなかで、鋼鉄のように鍛錬された不屈の闘士であるとされる人物である<sup>96</sup>。金クムスを含め、家族のうちの5名が革命のために犠牲となったのである。しかし、「過酷で無慈悲な運命を与えた神様も、優れたその家族の血統を継承させるために」<sup>97</sup>、金クムスの弟（金リャンナム）だけは生き残った。この金リャンナムを探しだし、登用したのは金正日組織指導秘書であった。金リャンナムは、文学芸術部門の事業を指導する党中央委員会の指導員になり、金正日の事業を精力的に補佐した。その後、金リャンナムの次男が父親の母校である「平壤音楽舞踊大学」を卒業し、晴れて万寿台芸術団で芸術創造の道を歩み始めた。先烈が血を賭して開拓した革命は、このように代を継いで継承、完成されて行っているのであると<sup>98</sup>、回顧録のなかで強調されている。

##### 5) 開国元勳となった同志のパターン

現今の北朝鮮政権が1960年代までの派閥闘争の末に、金日成らのいわゆる「パルチザン派」によって構築されてきたことから、抗日パルチザンが展開した闘争の過程や経験は、領導芸術に欠かせない要素となっている。このことは、これまでの記述からも明らかであろう。金策、崔賢、崔庸健、姜健、崔光らの革命活動と金日成に対する忠誠は、無論革命の継続性を重視する観点から、金正日に対する忠誠に引き継がれるべきものである。この

---

94 同上、163頁。

95 同上、163-164頁。

96 同上、314頁。

97 同上、320頁。

98 同上、316-322頁。ちなみに、崔賢の息子である崔竜海は、現在朝鮮労働党中央委員会政治局常務委員、同党中央軍事委員会副委員長、共和国国防委員会委員、朝鮮人民軍総政治局長として金正恩体制を支えている。

回顧録では、先に挙げた代表的な抗日パルチザンのうち、崔賢（「百戦老長—崔賢」）と金策（「革命家金策」）が一節を割いて語られている。

崔賢は、1930年代後半だけでも数百回の戦闘を経験し、そのなかで卓越した軍事指揮官として才能と無比の勇敢さを見せた人物として描かれている。崔賢は、金日成のそばで彼を奉じ、補佐することを望んでいたが、いざ困難な戦闘が起こるや、いの一に敵に向かう責任感が彼の忠臣たる真骨頂であり、人間味を物語る特殊な魅力を備えていた。崔賢は逝去直前でも、「首領様は元気か、金正日組織指導秘書同志様は元気か」と尋ねた。崔賢の功績は、家族として党と首領しか知らない忠臣に育ったことである。現在、崔賢の息子たちは、金正日が創建した哨舎で、人民大衆を天と見なす「ウリ式社会主義」を輝かせ、革命の第三世代、第四世代を忠臣に育てるために積極的に活躍している<sup>99</sup>。

金策は、饒河で遊撃隊を組織しつつ、北満の東北抗日聯軍第3路軍の主要な職責を務め、朝鮮革命と中国革命のために輝かしい活躍をした人物として語られる<sup>100</sup>。金策が自ら率いる隊員らに強調した思想は、「革命同志を愛せよ、愛する時には自らの心臓のように愛せよ、革命同志より貴重な存在はこの世の中にない」<sup>101</sup> というものである。金策はその生涯を金日成の忠実な戦友として過ごした。それゆえ、金策が死去した後は、金日成は金策の子供を親のように面倒を見た。彼らを外国留学に赴かせ、結婚式を用意し、孫が生まれたときにはお祝いを催し、自宅で家族とともに会食も行った。また、金策の名前を冠した市や工場・企業所、大学なども作り、金策市には彼の銅像も建てている<sup>102</sup>。金日成が金策を忠臣のなかの忠臣であると評価したのは、金策が金日成を領導の中心に置いたからである。このことを金日成自身が次のように語っている。

「私を統一団結の中心に置く過程を通じて、我が国の革命においては領導中心が形成されました。この領導中心を構築するのに金策は卓越した貢献をなしました。……遠東の基地に集まった朝鮮共産主義者の間では、地方主義や領導権の奪取のようなことはなかったのです。皆が純潔な人であり、さらに金策や崔庸健のような老長らが、はじめから私を前面に押し立てたので、領導の中心が確固たるものとなりました」<sup>103</sup>。

99 『回顧録』4-2、313-319頁。

100 『回顧録』8-2、135頁。

101 同上、137頁。

102 同上、153-154頁。ちなみに、金策の長男である金国泰は、朝鮮労働党中央委員会政治局員として金正日、金正恩体制を支えたが、2013年12月に死去した。

103 同上、145頁。なお、注1で記したように、回顧録の第7巻、第8巻は、金日成の死後、朝鮮労働党中央委員会が「委任」という形で要綱や遺稿、党の文庫に保管されている各種資料を基に「継承本」として発刊したことから、金日成自身の回想に当たる部分においても敬語で記載されている。

以上、金日成とその同志らを叙述する際に見られる、5つのパターン別の人物像やそれを通じて示される、革命同志の指導者に対する忠誠心・模範的考え方の描かれ方を検討した。そのなかでの特徴を改めて要約すれば、第一に、革命先烈らが血で固守してきた信念を捨て、その創造物である社会主義を捨てたことにより、少なくとも国では国民の生活が塗炭の苦しみに陥ったという現実を前提に<sup>104</sup>、革命は生死を賭するだけの意義を持つものであり、北朝鮮の大衆に対する革命伝統教養の目的は、黨員として、また勤労者としての革命実践であり、日常生活のなかで革命精神を全面的に具現しなければならないことを模範として示している<sup>105</sup>。第二に、抗日連軍の闘士としてともに闘った中国人同志との緊密な関係の強調は、そのまま北朝鮮と中国の「伝統的關係」に置き換えられ、それは「代を継いで継承される」という両国の特殊な関係を想起させるものとなっている。第三に、抗日武装闘争期の朝鮮人民は、等しく貧しい生活を過ごしていたにもかかわらず、金日成らの革命を全力で支え、これに対して金日成は国家の首班になってもその恩返しを忘れない義理堅い指導者であることが描かれる。こうして、人民から出発し人民に帰着する指導者を形成しつつ、大衆と指導者の一体化を表現している。第四に、革命第二世代による革命継続の強調は、北朝鮮の政権そのものが革命遺族を中心に構成されていることから、それは権力の妥当性の表明に他ならない。同時に、革命第一世代は回顧録に示されるように、金日成に対して無窮の忠誠を尽くしたのであるから、革命継続の論理によって金正日への忠誠を求めることに繋がっている。第五に、開国元勳らに後世の人びとが金正日への忠誠を尽くすよう遺訓の形で語らせることによって、新しい指導者金正日の下に人民大衆が結集するよう、その基盤構築を図っているとまとめられる。

## 5. 結論

以上のように、問題の所在で述べた三つの側面から回顧録の論理展開・内容の分析を踏まえ、回顧録にみる領導芸術の手法について分析した。

ここで再度まとめておけば、第二章では、金日成は民族という共属意識に訴えることで人びとの共鳴感と呼び起こすとともに、人民のなかから生まれた指導者と人民大衆の一体化関係を形成する。その一方で、金日成は生まれながらの環境や背景、個人的資質により必然的に代を継いで継承された革命指導者であることが浮き彫りにされる。こうして、人民大衆は指導者の領導に従うべくことが形式化される。また、金日成は自律的かつ内発的に「自主」を認識・会得したことが語られ、建国以来北朝鮮が堅持してきた自主的立場の必要性が醸成されるなどの特徴が抽出された。

---

104 『回顧録』6-3 414頁。

105 朝鮮労働党中央委員会党歴史研究所『朝鮮労働党歴史』朝鮮労働党出版社、1991年、485頁。

第三章では、社会主義・共産主義建設を掲げた北朝鮮にとって、人民大衆を共産主義的人間に導いていくことは必然であり、その模範的思考が抽出された。共産主義的人間になるためには、党と首領のために、また労働階級と人民のためにすべてを捧げる献身さと革命の敵に対する敵愾心・憎悪心の醸成が必須である<sup>106</sup>。このために、日本帝国主義に対する批判と自国に対する賛美との対比、金日成らが抗日武装闘争において経験した「苦難の時期」と現在の社会生活との対比の手法を用いることで、外勢に対する内部団結とその継続、国家の軍隊を強化する政策の妥当性を裏付ける論理展開が図られている。

最後に第四章では、金日成の父親である金亨稷を含めた、彼の革命にかかわる周辺の人びとの人物像とその行動・思想を具体的に叙述することで、人民大衆に求める模範的な価値観、考え方、行動を示していることが抽出された。それは、黨員として、また勤労者としての革命実践の見本であり、日常生活のなかで革命精神を全面的に具現するための方法である<sup>107</sup>。また、体制における仁徳政治の宣伝、権力正統性、金正日政権の基盤形成を目的とする効果を生み出すものであると言える。

キーワード 北朝鮮、主体思想、領導芸術、世紀と共に、社会主義・共産主義

(Cui Ying Li)

---

106 金正日『主体思想について』朝鮮労働党出版社、2004年、69頁。

107 前掲、『朝鮮労働党歴史』485頁。